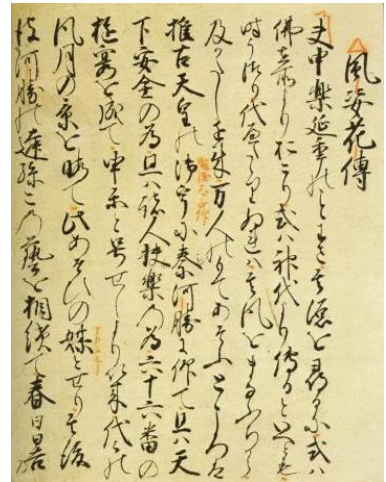


## 離見の見・世阿弥の言葉から学ぶ

能力開発工学センター評議員 奥田 健二



浄土宗の開祖、法然（1132—1212）の話から始めたい。

彼は平安末期、美作国に豪族の子供として生まれた。9才の時、父が日頃敵対していた武士の夜襲を受けて殺されたのである。父は遺言を残し、「仇討ちなどするな。仇は仇を生み、憎しみを増幅するだけだ。それよりも全ての人が救われる道を探究してほしい」と法然に告げたのだ。法然は仏門に入り研鑽に努め、やがて中国の随の時代の僧善導の『弥陀の名号をと念仏する全ての人が救われる』という教説を見出し、浄土教の中心思想とするに至るのである。ただし、この拙稿で強調したいことは、法然の宗教思想そのものではない。法然が仇討ちを思いとどまったという事実についてである。

法然は父を殺した武士に対して復讐心に燃える自己の姿を、一步高いところから見下ろすことができた。仇討ちが、おぞましい結果をまねくことを冷静に見通したのだ。

さてこのように、自分自身を離れたところから客観的に冷静に見ることの重要性を、「離見の見」という言葉で強調したのは、観世流能の完成者世阿弥であった。世阿弥は、その『風姿花伝』において、若年から老年に至るまでの人生の段階ごとにどのような心構えで稽古を重ねるべきかについて、率直な意見を述べた。平均寿命の短かった時代において、45～50才といえば、高齢者の段階の人間だと見なされたであろうが、この高齢者層の人間にとっての最大の課題は、後継者の育成であると述べているのは、現代の私どもの感覚と一致する。自分の体力や気力がまだ十分に残っているこの時期に、自分の芸を次代に伝承する努力をすべきだとしているのである。そしてたとえば、舞台をつとめるに当たっては、後継者に花を持たせ、自分は一步退いた存在に徹するのが「我が身を知る心」と強調するのである。

さらに「我が身を知る」といっても、それは低い次元での自己認識「我見」であってはならず、高い次元からの自己認識「離見の見」でなければならないとする考え方を、世阿弥は別の著作『花鏡』（はなかがみ）の中で明らかにしたのである。『花鏡』は直接には、舞台の上での在り方を説いており、演じている自分自身を含み、観客の反応をも広くとらえ、舞台全体の動きを高い次元から見通す「離見の見」の姿勢が大切だとするのである。この点に関して筆者は、この世阿弥の言葉がただ単に舞台の上の心構えを論じたものではなく、観世流能の未来までを視野に入れた上で、自分のあるべき姿を見つめ直した発言なのだと解釈している。能を完成の域にまで高めるにはこのような哲学があったのだ。

それにつけても、残念でならないことは、2001.9.11の同時テロの際、ブッシュ氏が短絡的に復讐心に走り、「離見の見」の冷静さを欠いてしまったことである。私どもは仏教や能の思想・哲学を世界に向けて発信する責任を負っていることを認識すべきなのだ。